

永平寺と琵琶湖周辺の史跡を訪ねる歌紀行（6）

長崎史談会名誉会長 宮川 雅一

心を洗われたところで、昨日夕食をしたところに行つて、同様な作法で朝食を戴き、一旦寝場所に戻って荷物を整え、玄関に預けて、寺内の拝観に行く。最初に監院寮のお座敷に通され、待つうちに、たくさんの土産を持って、大田監院が入ってこられた。いつものこぼれる様な笑顔である。長崎のこと当山のこと、話題は尽きない。

39、このたびの 旅行の 大きな目的の 大田監院に 逢えて嬉しき

その中で、この看板のひとつ大杉の内部が空洞になっていて大風で折れて、NHKの大晦日番組にもよく登場する鐘楼が破損した話があった。そのため修理費用や大杉を伐採する費用にそれぞれ数千万円が掛かったとのこと。

40、看板の 大杉倒れ 名物の 鐘楼破損も 慈悲の警策

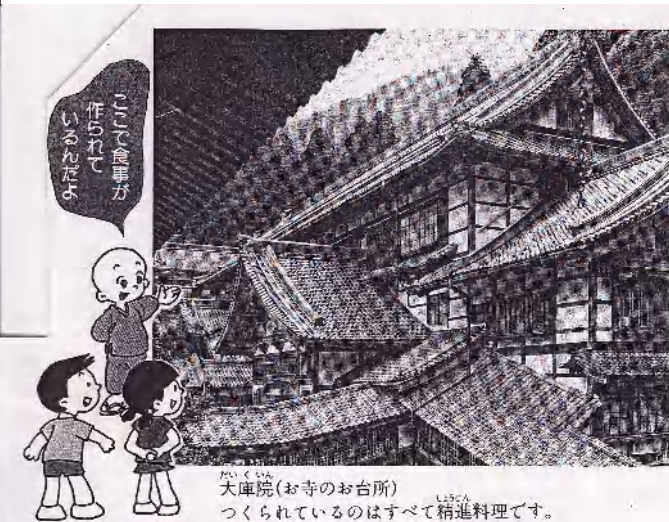
大杉の伐採にそんなに費用が掛かるのなら、景観保全の点からも幹を内部から補強することはできないのかと持ちかけたら、大変興味を示され、工事を担当した技術者に聞いてみるとのことであった。実現すれば特許もの。

41、骨折を 金具で補強 するように 大杉の空洞 修繕ならぬか

お土産はというと、なんと般若湯、昨晚のつぶやきが聞こえたのかとびっくりする。記念撮影をし、長崎での再会を約して、大田監院に暇を告げ、伽藍巡りを始める。

42、永平寺 監院の土産 般若湯 腹の底まで 見透かされたか

まず、仏殿、次は、14年前の短歌。伽藍は座禅の姿



を現し、ここが心臓のある場所。

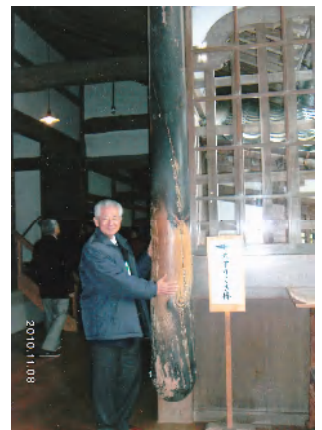
43、境内の 心の座にある 仏殿は 床に敷石 唐寺の風

次に、案内役の役僧もなかなか入れないという大庫院にある松竹梅の大きな日本画が正面に描かれた来賓接待の間「光明蔵」、150畳敷き「菩提座」、さらには天皇・皇后両陛下が泊まれた「妙高台」まで入ることを許された。これも大田監院の特別のご配慮によるものと感謝する。大庫院には、貫主の居所「不老閣」があり、入口に「韋駄天」が祀られ、古いエレベーターもあったし、ここが台所である証拠に大きな「すりこぎ」もぶら下がっていた。

44、大庫院 貫主の居所から 台所 すべて整う 大修行の場

45、韋駄天像 入口に居ます 大庫院 エレベーターも すりこぎもある

宗祖道元禅師の御尊像や御霊骨を祀る承陽殿を参詣に行く。14年前にも、齊藤茂吉の「ほのぐらき承陽殿(じょうようでん)のあかつきに石のたたみに額(ぬか)を伏したり」という短歌のこともあって、ここは時間をかけて拝観した。そのときに比べて外部木材の風化が酷く、この地の風雪の激しさを実感した。その際夕暮れにお参りして詠んだのが次の短歌。



46、歌人茂吉 感極まりて 額(ぬか)を伏す 承陽殿に 秋の黄昏

齊藤茂吉は、昭和2年(1927)にここを訪れていくつもの短歌を残している。いうまでもなく、承陽大師の称号は明治天皇が贈られたもの。

その他各所を巡って最後に、山門から辺りの風景をしげしげと眺めた。上方には仏殿が見える。次は同じ体験をした14年前の短歌。

47、山門の 中を貫く 廊下より 時を忘れて 仏殿を拝す

(次回に続く)